

「問い続け、価値を創造する子どもを育てる」 —自分の学びを見つめ直し、更新し続ける社会科授業実践を通して—

社会科研究部

1 はじめに

本校では、令和7年度から、「問い続け、価値を創造する子どもを育てる」を研究主題に掲げ、各教科において実践研究を進めている。本稿では、社会科部として、これまでの研究の成果と課題から、これからの研究について、現段階での内容を述べる。

2 これまでの研究から

本校では、2020年から「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」を研究テーマに掲げ、研究を推進してきた。それについては、広島大学附属小学校研究紀要第53号にまとめられている。研究を通して、以下のような成果と課題が見られた。

(1)成果

- ・子どものさまざまな「〈他者〉を楽しみ続けること」の育ちが見えた
- ・学習・経験を積み重ねて、長い時間をかけて、授業やカリキュラムを育むことができた。

(2)課題

- ・子どもが「わたし・自分の」学びを自覚できているのか

これまで、論争問題学習において、子どもに見えづらい立場や視点をあえて取り上げた。その中で、省察的に思考する姿は見られたが、子どもにとっての当事者性の弱まりも感じられた。また、自分の立場や意見を抜きに社会問題についての意見だけを述べるような姿も見られたが、社会問題を考える過程に「わたし」は存在しているか、という問題を感じた。また、自分の意見を説明的に記述するものは多くみられたが、「自分がどう感じたか」といった自分の視点での記述が乏しく、更新したり変容したりした自己を自覚化する記述はあまり見られなかった。

そこで、令和7年度は、子どもたちが学んでいく過程で、自身の学びを自覚し、学習活動によって考えが更新したり変容したりすることを自覚できるようにすることが必要と考え、「自分の学びを見つめ直し、更新し続ける子どもの育成を目指す社会科授業づくり」とテーマを置き、教科研究を推進していくこととした。

3 社会科における『問い続け、価値を創造する子ども』の捉えと『自分の学びを見つめ直し、更新し続ける』姿について

社会科における『問い続け、価値を創造する子ども』とは、『社会的事象に対して、多角的な視点から問い続け、よりよい社会の在り方（社会的事象に対する解決策や合意点など）を考えていくこと』だと考える。そのためには、「社会的事象に対して多様な視点から物事を捉えることで、これまでとは違った見方や考え方ができるようになる。」ことが求められる。それには、学習過程の中で、自身の現在の学びの状態が分かり、自分を見つめ、新たな視点から考えることのできる授業づくりが必要だといえる。

社会とは一側面から見たものであり、答えがはっきりとしない社会的事象も多くある。それらの事象に対して、「なぜだろう？」と既存の知識や理解に対して問い直したり、授業での自分や多角的な資料・学習者との対話を通して多様な視点に立って物事を捉えたりして、判断できるようになることも重要である。対話を通して児童が異なる意見や価値観に触れ、自分の考えを省みた後、課題に対して考えを再構築する＝「自分の学びを見つめ直す」ことで、気づかなかった価値や理由と出会い再度自分の考えを吟味すること＝「更新し続ける」につながるのではないか。その積み重ねが、予測できない変化と前向きに向き合い、主体的に学び続けて自らの能力を引き出すことにつながるのではないだろうかと考えた。

4 社会科における授業づくり

研究推進にあたり、本校社会科部では、次のような点で授業づくりに取り組んだ。

- (1) 論争問題（解決しがたい問題や意見・見解が対立している問題）、多様な視点から考えられるような授業展開

対立する意見に触れることで考えが揺らぎ、解決や合意形成、意思決定するために新しい視点での情報を自ら求める。それらを比較・検討し、根拠をもとに自分の考えを再構築することで、更新し続ける学びへとつながることをねらう。

- (2) 学びの過程・考えを可視化できるようにする

社会的事象に対して、自分の考えや意思決定が、条件や理由により変容することがある。OPP シートなどを用いて学習者の自身の学びの変容を自覚できるようにする。

（文責 深渡瀬 聖子）

【引用参考文献】

- ・見方・考え方 社会科編（2017）澤井陽介 東洋館出版社
- ・これからの社会科教育はどうあるべきか(2023)澤井陽介 中田正弘 加藤寿朗 宗實直樹 東洋館出版社
- ・広島大学附属小学校研究紀要第 53 号